

竹取物語（たけとりものがたり）

【解説】

平安時代前期の物語で、物語文学の元祖と言われています。作者はよくわかっていませんが、現在でも、かぐや姫の物語として親しまれています。

全体の流れは次の通りです。竹取の翁が竹の中でかぐや姫を発見します。翁は黄金を見つけ、裕福になります。姫が美しく成長すると、貴族たちから求婚されますが次々と難題を出し、すべて断ってしまいます。さらに、帝にも噂が伝わりますが、やがて、月の世界の姫であることを明らかにし、月に帰ります。残された翁や帝は悲しみ、帝は、姫の残した薬を富士山で焼いて話は終わります。

竹取物語

《物語の始まり》

いまはむかし、たけとりの翁おきなといふものありけり。
野山のやまにまじりて竹たけをとりつつ、よろづずのことにつかひ
けり。名なをば、さぬきのみやつことなむいひける。そ
の竹たけの中に、もと光る竹ひか たけなむ一んひとすぢありける。あやし
がりて、寄りて見るよ みに、筒つつの中光りたり。それを見れ

ば、三寸ばかりなる人、いとうつくしうてゐたり。

翁いふやう、「我朝ごと夕ごとに見る竹の中におはするにて知りぬ。子になりたまふべき人なめり」とて、手にうち入れて、家へ持ちて来ぬ。妻の媪にあづけてやしなはず。うつくしきこと、かぎりなし。いとをさなければ、籠に入れてやしなふ。

たけとりの翁、竹を取るに、この子を見つけて後に竹取るに、節をへだてて、よごとに、黄金ある竹を見つゝることかさなりぬ。かくて、翁やうやうゆたかになりゆく。

この児、やしなふほどに、すくすくと大きになりまざる。三月ばかりなるほどに、よきほどなる人になりぬれば、髪あげなどとかくして髪あげさせ、裳着す。帳の内よりもいささず、いつきやしなふ。

《物語の終り》

その後、翁、媪、血の涙を流して惑へど、かひなし。あの書き置きし文を読みて聞かせけれど、「なにせむにか命も惜しからむ。誰がためにか。何事も用もなし」とて、薬も食はず。やがて起きもあがらで、病み臥せり。

中将、人々引き具して帰り参りて、かぐや姫を、え戦ひとめずなりぬること、こまごまと奏す。薬の壺に御文そへて参らす。ひろげて御覧じて、いとあはれがらせたまひて、物もきこしめさず。御遊びなどもなかりけり。

大臣、上達部を召して、「いづれの山か天に近き」と問はせたまふに、ある人奏す、「駿河の国にあるなる山なむ、この都も近く、天も近くはべる」と奏す。これを聞かせたまひて、

あふこともなみだにうかぶ我が身には死なぬ薬も

何にかはせむなに

かの奉たてまつる不死ふしの薬壺くすりつぼに文具ふみぐして御使おおんつかいに賜たまわはす。

勅使ちよくしには、つきわのいはがさといふ人うひとを召めして、駿河するがの国くに

にあなる山やまの頂いただきに持もてつくべきよし仰おおせたまふ。峰みね

にてすべきやう教ようおしえへさせたまふ。御文もう おんふみ、不死ふしの薬くすりの壺つぼ

ならべて、火ひをつけて燃もやすべきよし仰おおせたまふ。

そのよしうけたまはりて、土つちどもあまた具ぐして山やま

へのぼりけるよりなむ、その山やまを「ふじやまの山」とは名なづ

ける。

その煙けぶり、いまだ雲くもの中なかへ立ちたのぼるとぞ、いひ伝いっただえへ

たる。

【参考資料】

『新編日本古典文学全集12』（小学館）

『竹取物語（新潮日本古典集成）』（新潮社）

『新日本古典文学大系17』（岩波書店）